

研究ノート

1870年代における郵便の普及と認識 —錦絵に描かれた駅通寮・郵便柱箱（ポスト）の分析を通じて—

加藤 征治

はじめに

明治35年（1902）におこなわれた万国郵便連合加盟25年記念祝典の記念行事として「郵便博物館」が開館した。その後、郵便博物館は、同43年（1910）4月に通信博物館と改称した。さらに戦後、通信博物館は通信省が郵政省と電気通信省に分割されたのを契機に、郵政省付属となった。

今日の通信総合博物館は、郵政省・日本電信電話公社・日本放送協会・国際電信電話株式会社の4機関の共同運営かつ共同展示場を有する総合博物館として、昭和39年（1964）12月に開館した。

本稿で対象とする錦絵は、通信総合博物館の郵政部門である郵政資料館に収蔵されているものである。郵政資料館に収蔵された資料の多くは、通信省が管轄した業務に関連するものである。これに樋畑雪湖コレクションを中心に、袋井・赤坂・三島・石部・久住の各郵便局が所蔵していた資料を収蔵し拡充をはかり、また、古書店などから美術資料の買い入れをおこなった⁽¹⁾。ただし、運輸交通に関係する資料は、各府県から寄贈・出品という形式で供出させたものも含まれている。

郵政研究所附属資料館（郵政資料館）刊行の『図書資料目録⁽²⁾』によれば、同資料館には「美術（N）」の項目に分類される資料が525点ある。さらに、「美術」の項目内資料を内容によって細分⁽³⁾すると以下のとおりである。

（整理記号）	（資料内容）	（点数）
N-A	郵便全般	136
N-B	手紙・飛脚	107
N-C	通信・電信	18
N-D	交通資料関係	128
N-E	絵図関係	14
N-F	その他	111
N-G	切手のデザイン原画	11

郵政資料館という所蔵機関の性格上、郵便の歴史に関する資料が大部分を占めているのは当然である。郵便に主眼を置いていたからこそ、独特の資料群を構成しているともいえる。しかし、これら美術に分類される資料の収蔵された時期については不明なものが多い。

1 井上卓朗「郵政資料館所蔵資料概要」（『郵政資料館研究紀要』創刊号〈2010.3〉96～126頁）
2 郵政省郵政研究所附属資料館編『図書資料目録（下）』（郵政省郵政研究所附属知資料館、1992.4）190～205頁
3 資料内容については実態を把握するために、筆者が収蔵資料に対して適宜付したものであり、『図書資料目録』に細分内容は記されていないことを断っておく。なお、細分内容の確定にあたっては郵政資料館の井上恵子氏に助言を得た。

ただし、錦絵を含む一部の資料には、裏面に印や伝票などを付しているものがある。この印や伝票をみていくことによって①郵便博物館開館当時のもの。②樋畑雪湖の収集によるもの。③通信博物館のもの。とする3段階の収集がおこなわれ、今日の資料群を形成されたものとする。

資料の収集時期や資料の系統を分類・整理して検討することは、収蔵資料の特性を把握していくうえで重要な手続きである。それとあわせて、絵画資料の場合は描かれた内容の分析も必要である。郵政資料館が所蔵する錦絵の場合、とくに「逓信寮」または「郵便柱箱（ポスト）」に注目したものが多く。

これは「逓信寮」と「郵便柱箱」の両者に、郵便博物館開館以来、郵便の創業期をみていくうえで象徴的な事物と考え、収集を重ねてきたようである。

前者の「逓信寮」については、辰野金吾ら工部大学校一期生が、本格的な洋式建築を手がけるまでの間に登場した官製擬洋風建物の代表的な存在であったとされる⁽⁴⁾。その構造や工法は、純粋な西洋式とはいえないまでも、西洋技術を上手に消化した建造物であった。後者の「郵便柱箱」については、郵便の開業にあたって、人々が手紙をやりとりするための媒体として設置されたものである。東京市内にあっては、盛り場や門前町など11ヶ所に設置された。その後、郵便利用が拡張するにしたがって、設置数は増え続け、東京各所でみられるようになった。

しかし、「逓信寮」や「郵便柱箱」が設置された1870年代の人々が、郵便に対してどのように理解していたかは別の話である。そこで本稿は、まず郵政資料館所蔵錦絵のなかから逓信寮を描いた錦絵を抽出し、1870年代当時の浮世絵師は、絵の題材に逓信寮を対象として選ぶにあたって、どのように認識していたのかをみていく。次に、風刺絵や見立絵の一部に登場する「郵便柱箱」の描かれ方から、作品の暗喩された部分を読み解くことで、郵便を取り巻く環境を把握していく。そのうえで、錦絵が創業期の郵便に対して果たした役割とは何かを改めて考えてみたい。

1 逓信寮の成立

郵政資料館所蔵の錦絵から郵便の創業期にまつわる具体的な内容をみていく前に、「逓信寮」が、日本橋四日市に成立した経緯について確認しておこう。

明治元年（＝慶應4・1868）閏4月の太政官制の改定にともなって、逓信司が新設の会計官中に設置される。同2年（1869年）4月に逓信司は民部官、7月に民部省の所管に入る。そして、同4年（1871）9月に、民部省が大蔵省のもとに統合されると逓信司も移管され、同年9月、大蔵省所管下で逓信司から逓信寮へと昇格する。

次に、日本橋四日市に役所としての逓信寮が設置されるまでの経緯をみていこう。

明治3（1870）の『正院本省郵便決議簿⁽⁵⁾』によれば、郵便役所⁽⁶⁾が日本橋四日市に設置されたのは、同年11月のことである。この時、敷地を受け取る逓信司と敷地を管理していた通商司との手続きは次のとおりである。

-
- 4 明治前期日本における近代建築の歴史については、稲垣栄三著作集6『近代建築史研究』（中央公論美術出版、2007.6）「明治建築における模倣と創造」を参照のこと。工部大学校一期生が世に輩出されるまでの期間は、工部省技術官や無名の大工たちが、これまで培われてきた日本建築の技術を最大限に利用し、西洋技術を上手に消化させたとしている。
 - 5 郵政省郵政研究所附属資料館研究調査報告書3『正院本省郵便決議簿』第壹号（郵政省郵政研究所附属資料館、1991.3）
 - 6 郵便役所は、明治3年（1870）9月4日に民部・大蔵省の合議で設置が提案され、同年11月13日の「郵便役所規則」によって、東京に原局が設置される。（『逓信明鑑』巻4第15篇「郵便ノ部ノ一」明治3年11月13日条）

明後三日第九字、四日市元納屋、郵便役所為受取、当司官員致出張候間、御引渡し有之度、此段御掛合およひ候也、

庚午閏十月廿九日 駅 通 司
通商司御中

四日市元魚会所納屋壱ヶ所百拾坪余、建家・土蔵共御引渡申候也

庚午十一月二日 通 商 司
駅通司御中

前半部が駅通司から通商司へ敷地引渡しに関する確認であり、後半部が通商司から駅通司への回答である⁽⁷⁾。郵便役所の敷地として選ばれたのは、日本橋四日市にあった旧幕時代の魚会所納屋の跡地110坪余と建家・土蔵であった。割り当てられた元魚会所納屋は、役所として機能させるにはかなり手狭であり、劣悪な状態にあったようである。創業当時の郵便役所において翻訳業務をつとめていた塚原周造は次のように回想⁽⁸⁾する。

さうして其の事務を執る場所即ち役所は、日本橋の四日市（唯今の日本橋郵便局の西の方）に在つて、非常な破れ家でありましたが、天井もなく床もなし、真の土間敷で、兎も角寮の事務を執ることになったのであります。所が私は翻訳物が沢山ある為め、半日は翻訳、半日は事務を執つたのであつたが、四日市の役所は狭隘にして且つ終日喧騒の為め、（下略）塚原の回想から、郵便役所の建物は、大した手入れもせずに旧幕時代の魚会所納屋をそのまま使用していたことがうかがえる。

魚会所納屋の郵便役所が、擬洋風建築の駅通寮に改築されるのは明治7年（1874）4月のことである。その間に、郵便役所は駅通寮との組織合併がおこなわれた。また、手狭な日本橋四日市から銀座2丁目へ敷地移転の提案もあった。しかし、日本橋四日市の地理的な利便性⁽⁹⁾に勝るものはなく、周辺の敷地をさらに買い上げて駅通寮も引き続き同所を利用することになる。

2 駅通寮と錦絵

(1) 東京名所としての駅通寮

新しい駅通寮の建物は明治6年（1873）12月13日に起工し、同7年（1874）4月27日⁽¹⁰⁾に落成する。駅通寮を設計したのは、大蔵省営繕寮技術官の林忠恕⁽¹¹⁾である。

駅通寮の構造は木造二階建、屋根棧瓦葺である。正面玄関は切妻屋根に造り、1・2階ともアイオニックオーダーの柱を立て、隅角には張石をもちいて錠止めを施した擬洋風建築⁽¹²⁾で

7 『正院本省郵便決議簿』第壱号〈前掲注5〉36頁上段2面。

8 塚原周造「郵便創業時代の回顧」（『通信協会雑誌』第154号・通信事業創始50年記念号〈1921.4〉11頁）

9 『正院本省建築決議簿庶務』第壱号（郵政百年史資料第27巻『郵政建築史料集』〈吉川弘文館、1971.3〉263頁）明治4年11月13日省議に、日本橋四日市の地理的な利便性について「殊ニ自是全国之郵便御開相成候上ハ愈不弁相成候間、可然旧邸工本寮並一同御引移可相伺積ヲ以所々取調候得共、同役所之儀、都下中央最便之地ニ無之候テハ上下之利益不相成儀ニ付相応之場所見当不申」とみえる。また、銀座2丁目へ移転案が出たときも「駅通寮ノ儀、煉瓦石ヲ以テ堅牢ノ造営可相成目的ヨリ、銀座2丁目ニ於テ建築相成度段此頃相伺置候ヘトモ猶勘考候処、同寮ノ儀ハ都下中央商事最繁多ノ地ヲ要候ニ付、如旧四日市ニ建置候方、」（明治6年8月14日正院伺〈同書、272頁〉）とみえ、日本橋四日市の地理的な利便性が強調される。

10 通信省編纂『通信事業史』第7巻（〈通信協会、1940.9〉677頁）には、竣工を明治7年4月30日としているが『正院本省建築決議簿』（郵政百年史資料第27巻『郵政建築史料集』〈前掲注9〉277頁）には、駅通寮から正院に対して「駅通寮四日市旧地建築粗落成ニ付、来五月二日同所へ移転為致候（下略）」とした4月27日付の届けがある。したがって、正しくは4月27日の落成ということになる。

あった（図版1）。

駅通寮をはじめとする官公庁の擬洋風建築は、1873～74年ごろ東京の主要部に次々と建造された。この擬洋風建築ラッシュによって、東京の近代都市化が視覚的に人々も感じられるようになった。当然、擬洋風建築は日本における西洋文化導入の象徴として、浮世絵師も注目するところとなる。

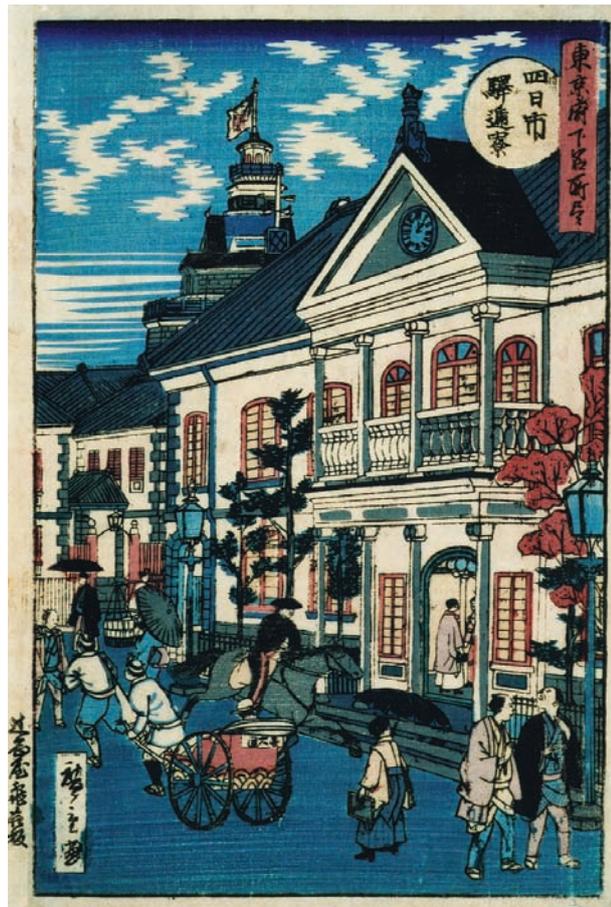
郵政資料館が所蔵する錦絵のうち、駅通寮を絵の主題・副題にかかわらず題材として取り上げたものは〔表1〕のとおりである。35点を有している。

35点の資料に共通した浮世絵師の駅通寮に対する認識は、郵便制度をつかさどる象徴という思想に基づいたものではなく、単純に近代的な建築物として「名所」のひとつに数えているに過ぎないという点であろう。〔表1〕にかかげた資料の大半が、表題に「東京名所」や「東京開化」という語を冠して、大なり小なりの駅通寮を登場させているのはそのためである⁽¹³⁾。

しかし、駅通寮に対するこの認識は浮世絵師特有の認識ではない。江戸から東京へ移り行く様子を目の当たりにした人々の共通認識としていいだろう。たとえば、明治10年（1877）5月刊行（のち、明治17年（1884年）6月再版。岡部啓五郎著）『東京名勝図会⁽¹⁴⁾』巻之上には、駅通寮（駅通局⁽¹⁵⁾）を次のように記している。

四日市 附駅通局 郵便起原

日本橋の東に当り江戸橋との間に在る街市を謂ふ、以前は床店繁昌の地なりしが、明治六年二月に無税の地に設けたる床店・葎箆張取除きの布令有りてより、方令広潤の通衢と成れり（中略）駅通局を同街の東角に在る、一大傑閣なり、楼上外面に円形の大なる時辰儀を装置け、夜間は内部に点灯して外面に透燿せしめ廻針を分明に認しむ〔郵便法は明治四



図版1 四日市駅通寮

- 11 林忠恕の来歴については、湯川甲三「故海軍技手林忠恕君略歴」（『建築雑誌』第80号〈1893.8〉）を参照のこと。林忠恕は工部大学校卒業の建築家が活躍する以前の擬洋風建築をになった建築技官である。明治6～7年の官公庁建築ラッシュ時には、駅通寮のほか、元老院など多くの官公庁設計を手がけた。
- 12 堀越三郎『明治初期の洋風建築』（丸善、1929.12初版。のち南洋堂書店、1973.8復刻。南洋堂版使用）148頁）
- 13 もっとも、通博収集資料35点中23点が開化絵の分野でとくに活躍した3代目歌川広重の作品であるという収集の偏りを考慮する必要はある。
- 14 龍溪書舎編集部編近代日本地誌叢書東京編②『東京名勝図会・東京名所独案内』（龍溪書舎、1992.7）「東京略説」5丁オ～ウ）
- 15 明治10年（1877）1月、寮制から局制への移行にともなって、駅通寮から駅通局へ改名する。

年三月始めて取設に成りしが日に月に繁榮して十三年度間に逋送配達せし郵便物一切ノ数ハ八千二百七万五千〇〇四箇此税金百三十六万四千九百八十二円なりと、其衆庶の便益繁昌なること推して知るべし]

小見出しは「四日市 附郵便局 郵便起原」としているものの、郵便の起源は「郵便法は明治四年三月始めて取設に成りしが」とあるだけで、ほとんど述べられていない。それよりも紙幅は郵便局の外観について割かれている。とくに郵便寮玄関口の時辰儀（大時計）を説明する姿勢は、時計に新しい名所となる要素をみたからであろう。

以上にくわえて、本書は東京観光のガイドブック⁽¹⁶⁾として出版されたものであったことに注目すると、やはり明治初期当時の人々が郵便寮に対し抱いていた認識は、近代的な建築物として名所のひとつに数えているに過ぎないということになる。

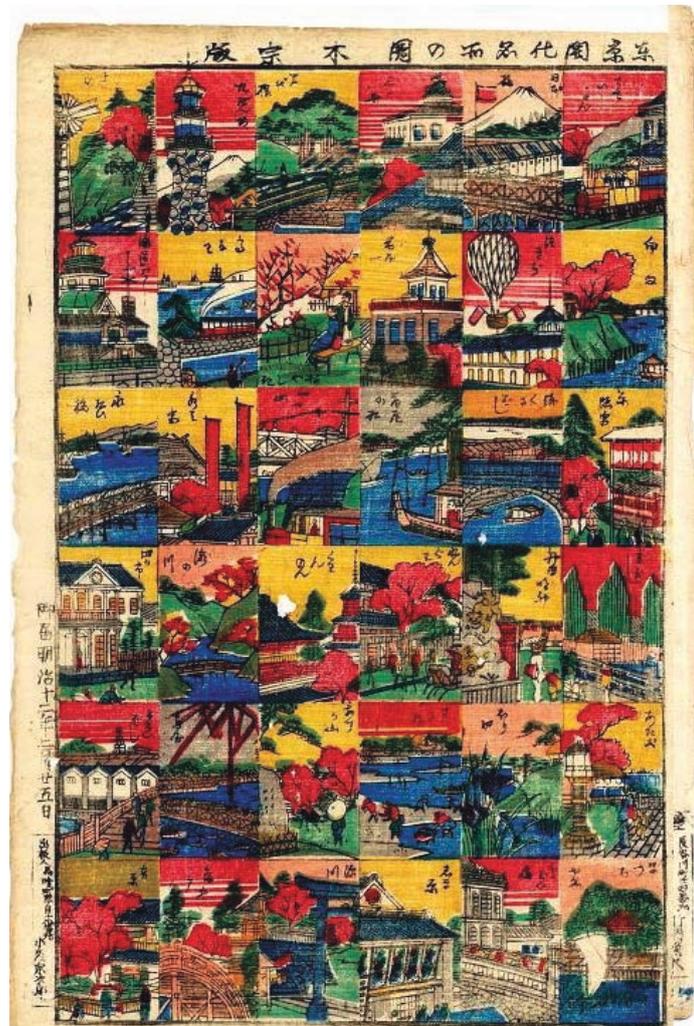
(2) 「東京開化名所」と「東京開化名所の図 水宗版」

〔表1〕をもとに、郵便寮が「東京名所」や「東京開化」と冠していることから、開化絵のシリーズ物に属していることは前項に述べた。しかし、個々の開化絵シリーズに関しては、内容の量的全貌が不明である。また、刊行期間も確定しきれていないことが多い。たとえば郵政資料館所蔵「東京開華名所図絵之内 四日市郵便郵便寮」(N-A2) も含まれている「東京開華名所図絵」シリーズは、1870年代から同80年代ごろまで作成され、100種を超える大作だったようである⁽¹⁷⁾。

このように内容の量的全貌が不明な開化絵シリーズにあって、逋博所蔵「東京開化名所」(N-A133) は、折本に仕立てられたことも手伝い、明治7年(1874)当時における東京名所の概略を明らかにすることができる。

さらに同資料館所蔵「東京開化名所の図 水宗版⁽¹⁸⁾」(N-A66/図版2) には、明治12年(1879)当時の東京名所とされるものが描かれている。

そこで明治7年閏12月版の「東京開化名所」を基に、明治12年2月版の「東京開化名所の



図版2 東京開化名所の図 水宗版

16 『東京名勝図会』(〈前掲注14〉巻之上「例言」1丁ウ)に「東京に来遊する観光探勝者の便に供す」とある。なお、近代建築の名所化とガイドブックの成立については、山本光正『江戸見物と東京観光』(〈臨川選書、2005.2〉「第三章 案内書の観光と東京観光」)を参照のこと。

整理番号	品名	絵師	出版元	刊行年月	備考
N-A2	東京開華名所図絵之内 四日市郵便駅逡寮	3代目歌川広重	熊谷庄七 三宅半四郎	(明治21年2月以前)	
N-A3	東京府下名所尽 四日市駅逡寮	3代目歌川広重	辻岡屋亀吉	(明治7年10月)	(改印(戌十))
N-A4	東京府下自慢競 江戸橋駅逡寮	2代目歌川国輝	伊勢屋魚吉	明治7年5月	ちりめん絵。改印(戌五)
N-A5	東京諸官省名所集	3代目歌川広重	林吉蔵	明治9年5月	
N-A6	東京開化世六景 江戸橋駅逡寮図	3代目歌川広重	(萬屋孫兵衛)		明治初期
N-A7	未広東京名所 江戸橋駅逡局	歌川国利	長谷川其吉	明治15年	刊行年記載のものと無記載のもの2種あり
N-A18	東京名所之内 日本橋より江戸ばしの風景	3代目歌川広重	萬屋孫兵衛		明治初期
N-A29	東京名所之内 江戸橋三菱蔵郵便局	3代目歌川広重	(堤吉兵衛)	—	N-A43資料の複製品
N-A30	東京府下自慢競 江戸橋駅石造	3代目歌川広重	伊勢屋魚吉	明治7年5月	改印(戌五)
N-A34	東京名勝開化真景 江戸橋駅逡局	長谷川竹葉	荒川藤兵衛	明治20年3月	
N-A35	東京名所図絵 江戸ばし駅逡局	3代目歌川広重	浅野栄蔵		明治初期
N-A36	東京名所図会 江戸橋郵便局	3代目歌川広重			2枚あり
N-A37	東京豪商寿吾呂久(包紙)	3代目歌川広重	萬屋孫兵衛	明治7年11月	改印(戌十一)
N-A40	荒布橋従江戸橋之真図	3代目歌川広重	熊谷庄七	明治10年2月	カ
N-A41	東京名所之内 日本橋真景	小林幾英	秋山武右エ門	明治19年12月	
N-A43	東京名所之内 江戸橋三菱蔵郵便局	3代目歌川広重	堤吉兵衛	明治14年9月	N-A29の原品
N-A44	東京真景図会 あらめばしより江戸橋	3代目歌川広重	大橋屋弥七	明治8年9月	カ 改印(亥九)
N-A45	東京名所石橋一覽之図	3代目歌川広重	海老屋林之助	(明治8年9月)	改印(亥九) カ
N-A48	東京開化名所 江戸ばしの真景	3代目歌川広重	萬屋吉蔵	(明治7年閏12月)	
N-A66	東京開化名所の図 水宗版	竹内栄久	水森宗次郎	明治12年2月	おもちゃ絵
N-A71	東京江戸橋之真景	小林清親	松木平吉	明治9年1月	
N-A81	東京真景図会 あらめばしより江戸橋	3代目歌川広重	大橋屋弥七	明治8年9月	カ N-A44と重複
N-A83	東京府下自慢競 江戸橋駅逡寮	2代目歌川国輝	伊勢屋魚吉	明治7年5月	改印(戌五)。N-A44と同種。ちりめん未加工もの
N-A105	(銅版画・石版画貼込帖) 駅逡局隆盛図	(不明)	(不明)	明治21年2月以前	石版画
N-A114	古今東京名所 昔江戸橋土手蔵日本橋・今江戸橋三つ菱の荷蔵	3代目歌川広重	辻岡文助	明治16年	
N-A133	東京開化名所	3代目歌川広重	萬屋吉蔵	明治7年閏12月	折本仕立
N-A139	古今東京名所 昔江戸橋土手蔵日本橋・今江戸橋三つ菱の荷蔵	3代目歌川広重	辻岡文助	明治16年	N-A114と重複
N-A147	東京名所之内 江戸橋三菱蔵郵便局	3代目歌川広重	堤吉兵衛	明治14年9月	N-A43と重複
N-A152	東京豪商壽語六	3代目歌川広重	萬屋孫兵衛	(明治7年11月)	N-A37と対 カ
N-A161	開化進歩日用双六	3代目歌川広重	杉浦朝次郎	明治12年10月	
N-A169	東京各大区中の消防組 警視庁え初出繰込の図	永嶋猛齋(歌川芳虎)	五十女勝五郎		明治初期
N-A191	(東京名所) 四日市	井上安治	(熊谷庄七)		明治初期
N-A196	東京開化名所 四日市郵便役所	3代目歌川広重	萬屋吉蔵	(明治7年閏12月)	N-A133と同種。ただし、1枚物
N-A225	東京名勝 日本橋	榎香	大沢屋	明治8年4月	改印(亥四)
N-A227	東京府下自慢競 江戸橋駅逡寮	2代目歌川国輝	伊勢屋魚吉	明治7年5月	N-A83と重複

※ここでの駅逡寮建築とは、林忠恕が設計した擬洋風建築(明治7年4月竣工～明治21年2月焼失)をさす。

※『図書資料目録』(下)をもとに作成。ただし本表作成にかり、書誌データに対して一部加筆訂正をほどこしてある。そのため『図書資料目録』(下)と表記が違う箇所がある。

※整理番号N-A139以降の資料は、『図書資料目録』(下)の公開後に収集した資料。図書資料仮データ(未公開)をもとに作成。

※データを補正するにあたって、東京都江戸東京博物館編『東京都江戸東京博物館資料目録 錦絵(目録編)(2009.3)』を使用した。

〈表1〉 駅逡寮建築を描いた通信総合博物館所蔵錦絵一覧

- 17 東京都江戸東京博物館所蔵「東京開華名所図絵之内 深川州崎汐干狩」(資料番号:91220225)は「御届明治九年五月三十日」「百三十七」と届・番号が枠外にふられている。この「百三十七」という番号は、作品に対する通し番号としていいだろう。また、同館所蔵「東京開華名所図絵之内 駿河町三井銀行」(資料番号:91210340)には「御届明治二十年十月 日」と届が記されている。したがって、作成期間は明治初年から20年代にかけて作成されたものと判断してよいだろう。東京都江戸東京博物館編『東京都江戸東京博物館資料目録 錦絵(目録編)』(東京都江戸東京博物館, 2009.3)を参照のこと。
- 18 本資料は開化絵のようなシリーズ物ではなく、おもちゃ絵に分類される1枚刷りである。しかしそこに描かれている内容は、近代化していく東京の様子をうかがえる資料として、開化絵と同様のあつかいでよいものと考えられる。

図「水宗版」の内容を対照して、1870年代後半の東京名所を抽出したものが〔表2〕である。

「東京開化名所」が取り上げた名所は19ヶ所、「東京開化名所の図 水宗版」が取り上げた名所は36ヶ所である。単純にみれば、1874～79年の5年間で、東京名所が倍増したようにもみえる。しかし、これは5年で名所が倍増したというよりも、前者の「東京開化名所」は文明開化または名所の西洋化という観点に立脚し、東京名所を描いた作品であると考えたほうがいだろう。

それというのも、対照した「東京開化名所の図 水宗版」の方は、東京開化名所として36ヶ所を取り上げているが、前掲の「東京開化名所」と重複しない21ヶ所のうち、大半は旧幕時代からの名所を引き継いで取り上げているためである。東京開化名所を謳っているが、総数からいえば半分は旧幕時代の名所である。

そこで「東京開化名所の図 水宗版」が、旧幕時代の名所をも東京名所として取り込んだ背景を考えたい。

1870年代の東京は西洋技術の模倣・導入によって都市の近代化が進み、駅通寮のような新しい名所が次々と誕生した。しかしその一方で、旧幕時代の名所が名所として健在であった。1870年代の東京にあっては、江戸はまだ過去の存在ではなかった。だからこそ、東京の名所として多くの江戸名所が引き継がれたわけである⁽¹⁹⁾。「東京開化名所の図 水宗版」に、旧幕時代の名所が東京になってから登場した新名所と同じくらい多く描かれているのはそのためであろう。

資料名	『東京開化名所』 (明治7年閏12月 改)	『東京開化名所の図 水宗版』 (明治12年2月 届)
	日本橋より一石橋	—
	京橋通り煉化石	—
	新ばしステーション	すていしょん
	汐留蓬莱橋	ほゝらい橋
	品川橋鉄道月夜	高なわ
	あたご山の見はらし	あたご
	する賀丁三ツ井組	三ツ井
	江戸ばしの真景	—
	第一国立銀行	海運ばし
	四日市郵便役所	四日市
	九段坂の灯台	九だん坂
	上野東照宮	東照宮
	金龍山山門	くわんのん
	よし原五階造り	吉原
	向嶋土手の灯籠	向しま
	両国橋大川ばた	両国
	筋違万代橋	万代橋
	浅草ばしより柳ばしの景	—
	為替会社	—
名 所	—	京ばし
	—	まつちやま
	—	日本橋
	—	つきぢ
	—	浅くさばし
	—	神田明神
	—	ほり切
	—	米屋一
	—	首尾の松
	—	すさき
	—	しま原
	—	梅やしき
	—	やツ山
	—	あすか山
	—	深川
	—	水天宮
	—	瀧の川
	—	亀井戸
	—	上の
	—	永たい橋
—	よろいばし	

※『東京開化名所』に『東京開化名所の図 水宗版』を対照させたため、水宗版の名所は順不同である

〈表2〉『東京開化名所』と『東京開化名所の図 水宗版』記載の名所

19 旧幕時代の名所が、東京名所として引き続き取り上げられたのは、慶應4年(1868)5月の上野戦争の被害が東叡山領内で済み、ほかの江戸名所は無事だったためである。『江戸見物と東京観光』(前掲注16)を参照のこと。

3 錦絵に描かれた郵便柱箱にみる郵便の普及

郵便柱箱（ポスト）は、人々が手紙をやりとりするのに必要不可欠な媒体である。郵便の創業に際して三都の各所と道中筋とに設置され、利用者へ供された。

郵便柱箱の設置については、明治3（1870）11月に民部省から東京府に対して「達案⁽²⁰⁾」が持ち出されている。

今般官私共書状郵便所御取建夫々御発行之御都合に有之、就ては府下 虎御門外・両国橋・筋違御門外・浅草観音前・牛込御門外・赤坂御門外・京橋・芝神明前・赤羽根橋・四ツ谷御門外・永代橋、総て拾壹ヶ所へ書状集メ箱及び各地賃銭時間表共、別紙雛形の通り掲し、且切手売捌所は町々の模様に応じ、壺町若しくは三、四町毎、町年寄或は身元有之者共へ為売捌候様致候積に付、其府目的を以人員・町名等巨細取調可申出候（下略）

民部省は東京府に対して、郵便所を開業するにあたり、書状集箱を虎御門外・両国橋・筋違御門外・浅草観音前・牛込御門外・赤坂御門外・京橋・芝神明前・赤羽根橋・四ツ谷御門外・永代橋の11ヶ所に設置することを提案している。

書状集箱の設置が提案された場所は、両国橋・浅草寺・芝神明前といったように、盛り場や門前町といった往来の多いところである。当然、往来の多いところに設置された書状集箱は人目につく。そして、その目新しい物体は文明開化の産物として錦絵⁽²¹⁾にも描かれることになる。

しかし、書状集箱そのものは、明治4（1871）の1年限りで役目を終えた。その後、書状集箱は郵便柱箱と名称・形容を替え、さらに柱箱の様式はいくつかの変遷⁽²²⁾をたどる。

郵便柱箱を描いた錦絵のうち、郵便制度の普及過程をうかがえる作品として「舶来和物戯道具調法くらべ」（N-A155／図版3）と「開化廿四孝 郵便」（N-A59／図版4）があげられる。

まず「舶来和物戯道具調法くらべ」をみていく。



図版3-1 舶来和物戯道具調法くらべ

20 『正院本省郵便決議簿』第壺号（前掲注5）41頁下段2面。

21 たとえば昇斎一景作の「東京名所四十八景 京はし」（N-A54）には、京橋のたもとに書状集箱が描かれている。書状集箱は目立つように脇に竿を立て、「郵便」と記した旗を掲げられたようである。この旗によって、書状集箱の場所が遠くからもわかるように工夫されている。

22 星名定雄「郵便ポストの変遷について」（『郵便史研究』25号〈2008.4〉37～46頁）を参照のこと。

「舶来和物戯道具調法くらべ」は歌川芳藤の作で、政田屋平吉から1873年（明治6年）7月に出版された。「舶来和物戯道具調法くらべ」は戯画に属するもので、さまざまな国産品と舶来品とが合戦を繰り広げている。三枚続のうち、中図に飛脚の状箱（国産）を蹴飛ばす郵便柱箱（舶来）が擬人化されて描かれている。

郵便柱箱が飛脚の状箱を蹴り飛ばすにあたって「ゆうびん曰、てめへのはこのそへ手がみ、こつちへみんなよこしてしまへ」と台詞が添えられている。

この台詞の意図するところは、当時の飛脚市場の情勢を示していると考えられる。すなわち、飛脚市場の占有（マーケットシェア）をめぐる郵便と飛脚の対立である。

従来の説では、明治5（1872）7月、郵便は北海道の一部をのぞく全国施行にさきがけて、旧幕時代以来の飛脚を説得したとされる⁽²³⁾。つづいて明治6年（1873）5月に信書通送の官営独占とした⁽²⁴⁾。

しかし、郵便の全国施行後も少なからず飛脚が一定の勢力で営業していた。そこで次に信書通送は官営の独占と決定したわけだが、それでも飛脚を市場から完全に駆逐したとはいえなかった。郵便が完全に飛脚を駆逐していれば、明治6年（1873年）7月に出版された「舶来和物戯道具調法くらべ」の画中には、両者の対立が描かれることはないからである。さらに郵便柱箱の台詞に「こつちへみんなよこしてしまへ」とあるが、市場を完全に独占していれば「よこしてしまへ」の台詞も吐かせないだろう。

したがって、制度上は明治5年（1872）に郵便の全国実施がなされ、同6年（1873）には信書通送の官営独占もおこなわれたが、実際には、依然として旧幕時代以来の飛脚を利用する人もいたことを示していると考えられるべきである。

次に「開化廿四孝 郵便」（図版4）をみていく。「開化廿四孝 郵便」は豊原国周の作で、武川清吉から明治10年（1877）1月に出版された。「開化廿四孝」は、表題にもみえるように開化絵に属する⁽²⁵⁾。また「廿四孝」の見立絵でもある。「開化廿四孝 郵便」の場合、コマ絵に郵便柱箱明治5年（1872年）型郵便箱（緑色）と郵便外務員を描くことでテーマの「郵便」



図版3-2 中図の拡大



図版4-1 開化廿四孝 郵便

23 郵政省編『郵政百年史』（通信協会、1971.3）91～94頁

24 郵政省編『郵政百年史』（前掲注23）94～96頁

25 「開化廿四孝」は「郵便」のほかに「電信」「牛（牛肉）」「新聞」「めがね」「かめ（洋犬）」「沓」「椅子」「温泉」「めがねばし」「じょうき（蒸気）」「こうもり傘」「寒暖計」「真写（写真）」「瓦灯（ガス灯）」「ポンプ」「馬車」「西洋床」「石鹸」「しやつぽ」「学校」「天長節之旗」「時計」「人力車」「貸ざしき」の24構図があった。山下武夫『日本郵便錦絵集』別冊解説（岩崎美術、1977.10）81頁

をあらわしている。

一方、構図の大半を占めて5代目坂東彦三郎の八重桐が描かれている。5代目彦三郎が演じる八重桐は「こもちやまんぼ 姫山姥」に登場する人物である。紙子衣装に風呂敷包みの様子から、二段目「やえぎりくるわぼなし 八重桐 廓 嘶」兼冬館の場⁽²⁶⁾である。

「郵便」と「姫山姥」の共通点は、もちろん「手紙」である。「姫山姥」において落ちぶれた八重桐は、兼冬館に潜入するための口実として右筆を騙る⁽²⁷⁾。右筆は手紙を代行して書く職種のことである。一方、郵便は投函された手紙を差出人の代行として宛先へ届ける通信事業である。両者はともに代行するという意味で手紙と深く関係する。

したがって「開化廿四孝 郵便」の構図には、「手紙」さらには「代行」という意味が暗喩されているとみるべきである。当時の人々は「開化廿四孝 郵便」をみて、この暗喩を理解できたのである。さらにいえば、人々が「開化廿四孝 郵便」の暗喩を理解していたということは、明治10年（1877）の段階で、それだけ郵便の内容が人々の間に広く認識され、利用されるようになっていたということである。

むすびに

本稿は郵政資料館所蔵錦絵を中心に、駅通寮・郵便柱箱（ポスト）の2点に注目して、郵便に対する人々の認識をみた。そして錦絵から明らかにしたことは次の3点である。

- ① 浮世絵師の駅通寮に対する認識は、郵便制度の象徴という思想に基づいたものではなく、単純に近代建築物として「名所」のひとつに数えているに過ぎない。また、この認識は1870年代当時の人々の共通認識であった。
- ② 「舶来和物戯道具調法くらべ」に描かれた郵便柱箱と飛脚状箱は、明治6年（1873年）時点の飛脚市場における郵便と飛脚の情勢を描いたものである。信書通送の官営独占がなされるなかで、飛脚の抵抗する様子がうかがえる。
- ③ 「開化廿四孝 郵便」の構図には、「手紙」「代行」という意味が暗喩されている。当時の人々は「開化廿四孝 郵便」をみて、この暗喩を理解できた。さらにいえば、明治10年（1877）には、それだけ郵便制度が世間に普及していったことを示す。

ここで今一度、創業期の郵便を取り巻く状況を整理しよう。

郵便制度は、明治4年（1871）1月24日に太政官布告⁽²⁸⁾によって3月1日に誕生した。そして、都市用と道中筋用の書状集箱を要所に配置した。さらに、三都の郵便役所⁽²⁹⁾から各地



図版 4-2 開化廿四孝 郵便の拡大

26 『姫山姥』第二（日本古典文学大系50『近松浄瑠璃集』下〈岩波書店、1959.8〉191～192頁）に「紙子の袖に。おく露と。ともに離れし妹背の中。あはれ昔の全盛の。松の位も冬がれし。風呂敷づゝみ。行く先は。知らぬ旅路にとぼとほと。（下略）」と八重桐の様子がみえる。

27 兼冬館に潜入する際、八重桐は自分を売り込むために「是は難波の遊女町に。たれしらぬ者もない傾城の右筆。濡一通りの状文なら恐らくわたしが一筆で。かなはぬ恋も仮名書筆。びらりしやらりのかすり墨生娘遊女手かけ者。後家尼人の女房まで段々の書き分けは。わたしが家の伝授ごと。もしそんな御用ならお頼みあれ（下略）」と述べる。（『近松浄瑠璃集』下〈前掲注26〉192頁）

への到着時間と賃銭の一覧（「各地時間賃銭表」）と郵便利用者向けの説明書（「書状ヲ出ス人ノ心得」）に、郵便開業の太政官布告を付して公示した。しかし、利用者数は芳しくなかった⁽³⁰⁾。

明治5年（1872）7月に全国郵便の実施、同6年（1873）4月に均一料金制を敷き、郵便制度の整備をはかった。その成果が結実して利用者数は着実に伸びてきた。

次に、錦絵が創業期の郵便に対して果たした役割とは何かを考えてみたい。

まず、擬洋風建築の駅逡寮に対する浮世絵師の認識については、あくまで擬洋風建築の外観に文明開化や西洋文化をみたのであって、郵便制度をつかさどる象徴として駅逡寮をとらえていたのではない。このことは駅逡寮を対象とした作品の大半が開化絵に属し、名所として紹介されていることからうかがえる。

しかし、浮世絵師が駅逡寮を東京の名所として次々に作品化することで、それを手にした人々に対して、まずなによりも駅逡寮の存在を認識させることができた。

郵便制度を普及させるには、制度の施行とは別に、人々に広くその存在を認識してもらうことが必要不可欠である。それというのも郵便が開業した当初、多くの人々は郵便取扱所と飛脚とをまったく同一に考えていた⁽³¹⁾。そのため、まず郵便業務の内容が飛脚のそれと違うことを人々に認識させることが必要であった。それには、駅逡寮へ足を運んでもらい、自分たちの目でみてもらうことが最良の方法である。

このような背景も一因となって、駅逡寮は魚会所納屋の役所を擬洋風建築の役所へと改築改装したのだろう。

そこへ浮世絵師が東京名所として、また文明開化の一例として、派手な色彩で駅逡寮を描いたわけである。人々は新名所として駅逡寮を訪れ、実際に自分の目で駅逡寮を確認するようになる。

このことは郵便柱箱（ポスト）についても当てはまる。往来の多いところに設置された郵便柱箱は人目につく。その目新しい物体は、文明開化の産物として浮世絵師も注目し、画中のひとコマとして描くわけである。

人々は、浮世絵師の西洋文化に対する興味・関心から描かれた名所としての駅逡寮、名物としてのポストによって、自然と郵便の内容に対しての理解を深めていった。そして人々はかなり早いスピードで、自分たちの生活のなかに郵便に対する知識を取り込んでいった。都市部の人々に限っては、すくなくとも明治10年（1877）には郵便の内容に対して深く理解し、利用していたとみることができる。

明治4年（1871）に郵便が開業してから6年、明治7年（1874）に擬洋風建築の駅逡寮が落成してから3年後の明治10年（1877）には、開化絵であると同時に見立絵でもある「開化廿四孝 郵便」に描かれた郵便箱と郵便外務員をみて、作者の暗喩を読み取れるほどまでになっていたことが、そのことを示していよう。

以上のことを踏まえて、錦絵もしくは錦絵作者が創業期の郵便をどのように理解し、対応していたかを改めて述べると、錦絵に描かれた駅逡寮や郵便柱箱自体は、郵便の象徴ではなく、どこまでも名所や名物の題材でしかなかった。しかし、結果として、錦絵に駅逡寮や郵便柱箱が描かれることによって、人々に郵便の内容に興味を持たせ、郵便を活用する環境を作り出す

29 郵便役所は東京が日本橋四日市、京都が姉小路車屋町、大坂が中ノ島淀屋橋角に設置された。

30 郵政省編『郵政百年史』（〈前掲注23〉「郵政主要統計」）によれば、郵便役所・郵便取扱所が取り扱った明治4年（1871）の総通数は、566,000通であった。

31 老骨生「郵便創業一口噺」（『通信協会雑誌』第154号〈前掲注8〉44頁）

せたといえよう。

最後に、錦絵以外の絵画資料は、駅通寮に対してどのような姿勢で描いていたかを簡単にみておこう。

明治時代にはいると、西洋技術が本格的かつ積極的に輸入される。出版業界には銅版画・石版画・写真印刷などが輸入され、大量印刷が可能になった。手間のかかる錦絵は、時代が下るにつれて、新しい印刷技術に席をゆずることになる⁽³²⁾。

しかし、郵便業務に対する基本的な姿勢は、新しい印刷技術も錦絵と変わるところがなかった。あくまでも駅通寮は名所でしかなく、その領域からは脱却できなかった。したがって、駅通寮はガイドブックに挿絵入りで紹介されるようになる。

興味深いのは、ガイドブックのなかには、駅通寮を本文口絵に描いたものが登場する⁽³³⁾。数ある東京新名所のなかで、駅通寮が口絵に選ばれた理由は通信と同時に交通もつかさどる役所だからであろう。

そこで、より多くのガイドブックから、駅通寮もしくは郵便局の記事内容を絵画描写も含めて収集・分析していくことで、ガイドブックは郵便に対してどのようなイメージを持ち、駅通寮や郵便局を取り上げたのかを考察する必要がある。これらガイドブックの分析によって得られる視角は、制度からみる従来の郵便史研究とは違う側面から、郵便の普及に対する知見を抽出できることだろう。なお、本稿では錦絵そのものの分析については不十分なところも多かった。このことを含めて今後の研究課題としておきたい。

【付記】本稿を執筆するにあたって、郵政資料館の井上恵子氏には、多忙のところ資料閲覧の便宜をはかっていただき、さらに適切な助言もいただいた。また、法政大学大学院生南隆哲氏には、データ採取に協力いただいた。この場を借りて御礼を申し上げる。

(かとう せいじ 早稲田大学エクステンションセンター 講師)

32 明治期における錦絵の衰退と新しい印刷技術の台頭については、大久保純一『浮世絵』（岩波新書〈新赤版〉、2008.11）を参照のこと。

33 たとえば明治14年（1881）5月刊『一新諸国道中記』（田中菊雄編、潜竜堂・滝沢清画、松崎半吉〈求古堂〉版）や同15年（1882）7月刊『駅程明鑑道中記図会』（滝沢清編、松田幸助〈松田文書堂〉版）があげられる。